レッスン：7A

テーマ：Life（生）、現象、リアリティー（＊現実）

PHENOL7A/DOC

私の兄弟・姉妹たち、

スピリット、光、火の子供たちよ。私たちは常に主、絶対、主の聖性に抱かれています。

Life（生）とは何か？

私たちは人間が生きている、あるいは動物が生きていると言いますが、それを口に出して話す時、正確にはどういうことを意味しているのでしょうか？それは“生命”および“生きる”という言葉が各人の心のなかに呼び起こす個人的な意味に従って話しているのでしょうか？

生 (Life)とは何でしょうか？あるいは、時間・空間のスペクトラムにおいて、生（Life）の現象とは何かと言うべきかもしれません。まず、生 (Life)の現象を通じて大文字のLの生命(Life)に関して学び、理解すべきでしょうか？そのためには特定の道具とテクニックが必要となりますが、それは正しい思考と探求という項目のなかにあるかもしれません。

「私は道であり、真理であり、命である」および「私は光であり、この世に来る全ての人間を照らし出す」というキリストの言葉がありますが、これらの言葉における隠れた真理の中に入るためには、それらの意味を徹底的に学ぶ必要があるでしょう。

実際、生命(Life)の現象にはフォームまたは形が必要であり、そのためには生命の現象は時間・空間の概念のなかに置かれるのです。生命現象には空間が必要です。言い換えれば、何らかの空間を占有する形を伴っています。さらに、時間という枠内にありますが、それはいかにしてそうなのでしょう？

現象としての生命は波動のシステムとして説明することができます。この波動のシステムは実存（existence、3次元の物質界に存在すること）の世界のなかに保たれる、全体として異なった波動を創造します。この波動のシステムは実存の世界において、一定のサイクルの表現に特定のフォームを付与します。

実存といいますが、実存するためにはそれは完全なサイクルを示さなければなりません。その結果、実存の世界の領域に入ることになるのです。オリジン、源が何であろうとも、あらゆる生の現象はそれが鉱物であれ、植物であれ、動物であれ、人間であれ実存のサイクルを完了しなければならないということです。

実存のサイクルを支配する法則は非常に厳格です。生命現象の実存のサイクルの内部では絶対英知、絶対パワー、絶対善が統治しており、全てはこの神の機構のなかに属し、そこから漏れるものは何もありません。

まず、現象の意味、および現象の背後に隠されているものを理解するためには、人間の知性によって私達の周囲のものを調べる必要があります。

時の経過のなかで、多くの神秘家たちが真理に気づくようになりましたが、彼らはそれを自分だけのものにしなければなりませんでした。なぜなら、当時彼らが住んでいた社会の人々はそれを理解しなかったからです。当時の社会の意識や理解レベルは、もし真理を世間に漏らせば、気違い、魔女、吸血鬼などと見なされたり、あるいは災害をもたらした張本人と見なされるような程度でした。しかし、神秘家たちが長い間知っていたにもかかわらずそれらを証明することができず、また誤解されるので話すこともできなかった真理を、オーソドックスな科学が徐々に証明するようになるでしょう。

Page2

人間の肉体は肝臓、肺、心臓、その他の様々なサイズと形をした多くの器官から構成されています。これら全てが生きた人体を作り上げています。これらの器官は全て本質的には異なった強度と周波数の波動なのです。ですから、例えば目を構成している物質の波動は歯または心臓を構成している波動とは異なっています。これら異なった波動が一体となって生命という現象を生み出していますが、それらは全て物質内のエネルギーの波動です。それら全ての波動が互いに調和的に機能している時、実存する人体は調和的に機能しています。

人間は精子から始まりますが、私たちはそれを最も小さくて最も大きなものと定義することができます。創造全体が最も小さな精子のなかに含まれていますが、それは人間だけではなく、植物や動物界でも同じです。ただ、人間の場合は現象の背後に最も多くのものが含まれています。

実存のサイクルは誕生と共にスタートし、創造全体がこの誕生の法則に従い、次に幼児期、成長、発達、次世代の生成、そして最後に死という現象によって分解します。このようにして、生命現象のサイクルは人間界、動物界、植物界など、どの世界においても同じ原理の下で働いています。それぞれの種において、生命の現象はタイプによって成長、発達の速度が異なります。

絶対存在(Absolute Beingness)の絶対英知(Absolute Wisdom)はあらゆる創造物、全ての波動のシステムにおいて機能しており、全ては聖霊(Holy Spirit)の力強い現れの下で調和的に働いています。

現象的には、異なった全ての種においても同じ器官は同じ機能を果たすようです。つまり、牛においても、犬においても、猫においても目はそれぞれ同じ機能を果たします。しかし、生命現象として動物と人間の間には違いはあるでしょうか？

もし違いがあるとすれば、その違いとは何でしょうか？あらゆる生物界における生命現象は、絶対英知(All Wisdom)においてあらかじめ決定されている実存のサイクルを有しており、そのような事実を見れば、超知性(Super Intelligence)または真の生命(Real Life)の存在を十分に確信することができます。

物質からできている頭脳でこのことを理解するのは困難です。しかし、だからといって周囲に証拠があるにもかかわらずその存在を否定できるというわけではありません。

私たちは無数の形態の生命現象に囲まれており、それら全てはそれが物体であろうと、あるいはサイキカル体、ノエティカル体であろうとも絶対知性(All Wisdom)のなかで機能しています。それら全ては不変の法則によって支配されており、あらゆるものは絶対的調和によってコントロールされています。

「宇宙は絶対存在(Absolute Beingness)のキリスト意識で満ちている」

ここに酸っぱいオレンジ、つまりダイダイの小さな種がありますが、この小さな種のなかにダイダイの木の可能性が秘められています。湿気、温度、空気と地のエレメントなどの適切な条件が与えられれば、種は芽を出して大きく成長し、再び種のあるダイダイを実らせるようになり、その種のなかにも絶対英知とダイダイという木の実存的サイクルが秘められています。この種は後に同じ種類の木と受粉すれば、時間・空間のなかで始まったオリジナルの木と同じものを私に与えてくれます。

育ってゆくこの植物の何処に生命があるのでしょうか？それは種のなかにあり、そのために毎回同じものが育つのでしょうか？私たちは今二つの状態を見ています。小さな種の中の絶対英知にある生命現象の現れがあり、成長の様々な段階を通じてその発展を観察することができます。適切な条件のもとで、種は将来、時間・空間の次元において絶対英知のなかで開き、その中に秘められているものを私たちに与えてくれます。それは鉱物、植物、人間のみならず、あらゆる創造物のなかで生じています。ですから、

私たちは生命現象を見、観察しているのであって、生命それ自体を見ているのではありません。大文字の生命(Life)は絶対存在と同じです。

Page3

創造界における生命の表現は、ロゴス、聖霊(Holy Spirit)、生命の授与者(Life Giver)を通じて現れます。キリスト・ロゴスとは何でしょうか？福音書を書いた聖ヨハネはロゴスについて述べています。ギリシャ語では“archo”は“パワーにおいて”または“権威において”という意味です。従って、聖ヨハネによればヨハネの福音書の最初の部分は「パワー（権威）の中にロゴスが存在し、ロゴスは神と共にあり、ロゴスは神である」となるべきです。

しかし、聖書の英語翻訳では次のようになっています。

「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった…」となっています。この文において福音書は、パワーの中にロゴスが存在すると述べることから始まっており、初めにロゴスがあったとは述べていません。これを受け入れれば、ロゴスに終わりが来ることも受け入れなければなりません。絶対ロゴスとは「この世界に来るすべての人を照らし出す光」です。

私たちはまた生命現象における別の表現を見ることができます。スーパーサブスタンス (Supersubstance)、マインド(Mind)としてのノエティックな光およびノエティカルなものの両方が、想念(thought)として使われます。

これが人間と動物との違いであり、欲望的想念または想念的欲望のタイプのどちらであれ、動物は想念の像(idol)を作るためにスーパ－サブスタンス、マインドを利用するパワーを有していません。

生命現象における全ての動物と創造物は聖霊(Holy Spirit)の監督のもとにあります。人間の肉体もまた聖霊の監督のもとにありますが、人と動物は同じではありません。人間とは何であり、動物と人間との違いは何でしょうか？

私たちは人間について二つの方法で学びます。生命の現象として、そして生それ自体としてです。仮に人間は生命の現象のみであり、生命それ自体ではないとすると、肉体が分解すると共に人間それ自体の存在も終わり、永遠に残るものはありません。もし肉体の分解後、永遠に残るものが何もなければ、人間は自動的に動物や植物と同じ範疇に属することになります。なぜなら、動物や植物は永遠に続くものを有していないからです。

ここに書かれた内容すべてを盲目的に信じるよう期待しているわけではないのですが、あなた自身とエレブナに時間を与え、全体を深く勉強し、熟考するよう求めます。これは一連のガイドラインに沿って行うあなた自身のリサーチであることを忘れないでください。もし書かれたこと全てについてあなたが真摯に熟考しなければ、あなたは理論的知識を得ても、それ以上のものは得られず、空虚なエゴを膨らますだけとなります。

真理を探求する目的のひとつは、あなたをあらゆる形の恐怖から解放することです。探求は知識および様々なレベルへの同調へとあなたを導きますが、知識は獲得された何かであり、あなたが手に入れたり失ったりするものと何ら変わりません。

**経験による知識は、いかなる泥棒もあなたから奪い去ることのできない宝物のひとつです。**

英知はあなたに属する何ものかであり、時間・空間内におけるセルフ・エピグノシスとしてのあなたの意識の動きと調和しているあなた自身の表現です。この英知は低次のセルフ、それともインナーセルフ（内なる自己）の表現なのでしょうか？

私たちは経験による知識を通じて知ることに到達するのです。

大文字の本来のセルフ(Real Self)と、私たちが今日まで本来のセルフと見なしてきたセルフで実際には小文字のセルフ、時間・空間のセルフ、常に変わりゆくセルフであるセルフとの違いを区別する助けになるのは、経験による知識です。生命現象の現れの表面下に隠れている本来のセルフ(Real Self)を掘り起こす必要があります。

これがエレブナの目的のひとつです。私たちは自分が誰であるかを知るに至る必要があり、それが古代ギリシャの「汝自身を知れ」という格言の本当の意味です。

それは自己分析、自己観察、自己調査を行い、現在のパーソナリティーの現れとエゴ中心的な野心の背後にある動機を突き止め、理解することによって達成されます。

Page4

現在のパーソナリティーはそれ自身の恒久的なステータスを信じており、そのステータスを縮小しようとするあらゆるワークに抵抗し、それと戦おうとします。

ですから、現在のパーソナリティーがその最高位と恒久的ステータスを保持するために用意する罠と闘争に気づく必要があります。

要するに私たちは光、つまり私達のセルフ(Self)を見ることができるようになるために、道にあるゴミを掃除しなければならないのです。私たちを導き、正しい変化への方向を示してくれるセルフ（Self）を求め、見いだす必要があります。ですから、鏡でみることのできる身体を知るだけで満足したり、時間・空間内における欲望的想念および想念的欲望の現象としての自分を見るだけで満足すべきではありません。もっと深く自分自身のなかに入っていく覚悟が必要です。

魂のセルフ・エピグノシス(Soul Self-Epignosis)としての私達は神の似姿です。

時間・空間的意味における現在のパーソナリティーとしての私たちは、主として欲望的想念から成る形態として物質世界における生命の表現以外の何ものでもありません。

魂のセルフ・エピグノシスはインナーセルフへの同調を通じて低次のセルフから現れることができます。しかしそのようなフィルター（＊低次のセルフというフィルター）を通じた場合、完全なものとはなりません。

現在のパーソナリティーのこの構造に頼っているだけでは、長期的な安定と本来の強さを得ることはできません。私たちはその事実を、自分たちの行動や思考の裏に潜むある種の名状しがたい恐怖から、さらに毎日の出来事の中において自分たちの存在全体の目的と意味について私たちに全くの不満足感をもたらす一種の空虚さから、本能的に理解します。

私達の存在の空虚さは絶望、悲しみ、孤独、放棄された状態などにおいて、特にはっきりとわかります。自分がひとりぼっちであることを認識したり、また特に、即座に慰めを得られるという証明が無いことを感じるような時があります。大多数の人々にとって、システムに対するこの種のショックがきっかけとなり、探求が始まります。この段階ではそれが正しい探求であるか否かはあまり重要には見えません。

探求は特定しがたく、かつ非常につかまえどころのないインナーセルフを見いだすことです。

インナーセルフは絶対存在に関するある相対的知識へと導きます。聖パウロによれば、「死滅していくものは不滅の衣をまとい、死すべきものは不死の衣をまとうであろう」と述べています。

疑問はまだあります：生命現象とは正確に言って何なのだろう？生命とは何か？生命現象とは何かを定義・観察するにはどのようにスタートすべきか？生命現象とは波動のシステムであり、あらかじめ決定されている存在のサイクル内で、総体としての波動を与えてくれます。それは神の意志によって生存しますが、神の意志というとき、それは聖霊の指揮を通じてという意味です。

前に言及したように、生命現象としては、私たち人間の本能・欲望は動物の本能・欲望とさほど違わないのにもかかわらず（それでも違いはありますが）、セルフ・エピグノシスとしてのセルフという面ではその生命現象としての生命は（動物とは）全く異なります。

人間は全てHoly Monad Spirit Being Self（聖なるモナドである霊的存在としてのセルフ）の非常に小さな放射であり、

セルフ・エピグノシスとして、生命現象としての実存のサイクルが完了すると、

続いて別のサイクルに入り、さらに神の恩寵の栄光の中に入るために全ての宇宙における他のサイクルに入ります。

探求は最初、生命現象としての私たちの周囲にあるものの調査へと導き、それによって多くの発見がなされることでしょう。私達は低次のセルフを調べ、物質を調べますが、最初に出会うものは超知性です。超知性は私たちの肉体において細部まで非常に正確に数学的に働いており、一本の毛髪ですら見逃すことはありあません。この超知性は全ての細胞、原子、分子の中心において絶えず働いており、私たちがなおざりにしている時でも肉体の面倒を見ており、私たちが傷があることを忘れてもそれを癒してくれます。私達が内側にある絶対知性と初めてコンタクトする時、生命現象に対してさえ感謝をすることでしょう。

**低次のセルフを認識し始めるようになると、その瞬間まで本来のセルフのセルフ・エピグノシスが完全に隠れていたことに驚くことでしょう。**

不完全で、弱点を持ち、動物的な傾向と本能を持つ低次のセルフの姿に驚くと思います。

**低次のセルフをいくらかコントロールできるようになると、魂のセルフ・エピグノシスが発見され、それがインナーセルフの特質を現し始めるようになります。**

Page5

多くの権威者、組織が過去において真理を隠そうとしましたが、真理の探究者が真理の発見に失敗することはありません。本当の真理の探究者または神秘家は常に真理を見いだします。その人が世界のどの地域に住んでいようと、どの時代にいようと関係ありません。その人は真理を見いだし、光を見いだすでしょう。

以下のポイントを心に留めてこのレッスンを熟考してください。本能を与えられている生命現象とは何か？生命、および生命現象とは何か？

人間の現在のパーソナリティーとセルフ・エピグノシスとの違いは何か？それについて次のように考えてください。もしあなたが一匹の犬について調べれば、犬の全てを知ることができます。なぜなら、犬には個というものがなく、魂のセルフ・エピグノシスがないからです。しかし、一人の人間を調べることによって人類全体を知ることはできません。創造界において同じような人間を二人探すことは不可能です。一般的な枠のなかでパーソナリティーについて勉強するためには、このことを原理として心に留める必要があります。それによって、探求における出発点を見つけ、どのように進んだらよいかを知ることができます。

セルフ(Self)を低次のセルフからどのように解放していくか？インナーセルフに集中し、それを理論としてではなくリアリティーとして保持するにはどうしたらよいか？実存のサイクル(cycles of existence)とは何を意味するのか？

セルフ・エピグノシスとして皆さん各人は一つの面に集中し、勉強し、探求することができます。さて、ここでもう一つの問題に突き当たります。**あなたのインナーセルフが集中している時に、あなたの現在のパーソナリティーが欲望的想念と共に押し入ってきて、あなたの注意を他にそらそうとします。**

その時は、あなたが選択した活動を何回も繰り返しスタートさせようと試みることによって、インナーセルフが維持されることがわかるでしょう。探求と熟考を始めると早速そのような現象に出会い、互いに違うことをしようと望む二つのセルフに直面することでしょう。注意してください。

私たちは常に主、絶対存在、主の聖性に抱かれています。

EREVNA/PHENOL7A.EN/DOC

**エレブナの用語集**

**Absolute Beingness**：（絶対存在）これは人間が神とみなすもので、人間の理解を超えたものです。それはあらゆるものの絶対的原因であり、絶対生命です。

**Holy Monad**：（聖なるモナド）Absolute Beingnessは無数のHoly Monadから成り、各Holy Monadは無数のHoly Monad Spirit Self Beingsから成っています。

**Spirit Beings**：無数のSpirit Beingsが各Holy Monadを構成します。Spirit Beingsはまた、Spirit Being Holy Monad Selfと定義することもできます。

**Soul Self-Epignosis**：（魂のセルフ・エピグノーシス）これはSpirit Beingからの微小な放射であり、ロゴスの現れとしてIdea of Man（人間のイデア）を通じて創造界に放射されます。

**Epignosis**：（エピグノーシス）これは内側からくる知識です。

**Self-Epignosis** ：（セルフ・エピグノーシス）これはロゴスの質を有し、Self-Monad for Self-Realization（自己実現のためのセルフ・モナド）に対してSelf-Realised Soul Self-Epignosis（自己実現した魂のセルフ・エピグノーシス）となる能力を与えます。

**Permanent Personality** ：（永遠のパーソナリティー）Permanent Personality Self-Epignosis（永遠のパーソナリティーであるセルフ・エピグノーシス）はSoul Self-Epignosis（魂のセルフ・エピグノーシス）であり、それはその部分をそれ自体の中から放射し、現在のパーソナリティーを生命現象の世界の中の実存世界に継続的に転生させます。

**Permanent Atom**：（永遠のアトム）これはSoul Self-Epignosis-Permanent Personality（魂のセルフ・エピゴノーシスである永遠のパーソナリティー）内のArchetype Idea Law Cause（原型、イデア、法則、原因）であり、それは現在のパーソナリティーを継続的に生命現象の世界に転生させます。パーソナリティーの継続的な体験はここに記録されます。（＊atomは原子という意味ですが、西洋哲学ではアトムと言い、古代人が宇宙の素構成要素と考えた微小存在を指します）

**Present Personality**：（現在のパーソナリティー）Present Personality Self-Epignosis（現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシス）は実存世界における生命現象としての生命の現れである。現れている各Present Personalityはそれ以前の体験・転生の総体であり、また新しい体験をする能力を有し、それによって思考・行動としての現れを変えることが可能であり、その結果意識を向上させることができる。

**Mind**：（マインド）創造界全体はマインドによって作られ、創造界における生命の現れはマインドを通じてなされる。全てはマインドであり、マインドを通じて超物質、物質など異なった波動のマインドが生じる。

**Psychonoetical World**：（サイコノエティカル界）感情・情緒、および５つの超感覚の世界である。

**Noetical World**：（ノエティカル界）思考および５つの超感覚の世界である。

**Ethers**：（エーテル）エーテルはその質によって４つのタイプに分類される。それらは感覚エーテル、運動エーテル、刻印エーテル、創造エーテルである。

**Heavens**：（ヘブン、天国）創造界には７つの異なったヘブンがある。最初の４つのヘブンはArchetype（原型）、Ideas（イデア）、Laws（法則）、Causes（原因）の各世界です。それらはBeingness（存在）の世界であり、そこでは生命は完璧に表現されている。他の３つのヘブンは実存の諸世界であり、そこでは生命は生命現象として現れ、それらは二元性の世界であり、対立する二極、およびイリュージョンの世界でもある。

**Autarchy**：（アウタルキー、自足、自立）自己充足の状態。この状態においては、動き、波動、振動はそれぞれ動かず、振動せず、発振していない。（＊経済用語では国家レベルの経済的自給自足の意味です）

**Evareskia**：（エバレスキア）これはAbsolute Beingness Divine Contemplation（絶対存在である神の黙想）がそれ自身を動き・波動・振動の状態を通じてそれ自身の中で表現した結果である。

**Voulesis**：（ブレーシス）これは神の意志である。非常に強力な肯定性であり、否定性の要素は全くない。

**Ontopiesis**：（オントピーシス）ロゴスの降下を通じて個別性を獲得した後、再びオリジンである源に帰ること。

**Egoenesthesia**（エゴエネステジア）：インナーセルフの認識

**Christoenesthesia**（クリシトエネステジア）：キリストとひとつになること。Christ self-consciousness（キリストとしての自己意識）

**Psychonoetical Centers**：それらは人間の各エーテル体のセンターであり、一般にチャクラとして知られている。正しい、適切な訓練によってこれらのセンターを活性化させ、サイコノエティカルなパワーを生みだすことができる。

**The Law of Cause and Effect**：（原因・結果の法則）この法則によって主に実存の諸世界でバランスが保たれる。この法則が保たれることによって、私達は学び、体験を得ることができる。これはひとつの段階であり、ここを通過して人間はontopiesisに向かう。

**Elementals**：（エレメンタル）個人が放射するあらゆる想念や感情は、想念的欲望または欲望的想念のいずれかのエレメンタルを生みだす。各エレメンタルはそれを放射した人から独立して、それ自体の形と生命を持つようになる。

**Aperon**：これは無限の無限大であり、それを超えたものは人間の頭脳では考えることは不可能である。

**Entity**：（実体）質または関係性を問わず、実際に存在する何か。

**Hypostasis**：（ヒポスタシス）ある状態にあること。下にある物質。真実とは関係しない。ある状態のBeingness。

レッスン:８"A"

テーマ：現在のパーソナリティー

PNALITY8A/EN.DOC

兄弟・姉妹の皆さん、

聖霊、光、火の子供達。私達は常に神、絶対、聖なる存在に包まれています。

「あなた方は皆、至高の父の息子達である」

「天にまします我らが父よ・・・」

「人は父のアイコンであり、父に似ている」

上記のような引用から考えると、人間は恐らく動物から進化したのではなく、下降してきた人間の起源は至高の存在にのみ帰することができます。人間は昔から常に、そして今も、さらに将来も質的には神であり、そうでなかった時はありません。

人間について話す時はどちらの人間であるかと自分自身に問わねばなりません。私達は前に、永遠の人間と現象の人間を区別しようとしました。勉強のために便宜上、私達は人間を永遠のセルフ(Self)と創造界における様々な段階の現れに分けることができます。

永遠のセルフは聖なるモナドに属し、その一部です。絶対存在は無数の聖なるモナドから成り、各聖なるモナドは無数のSpirit Self Being（霊であるセルフの存在）から成っています。聖なるモナドに関しては、それが父なる神と同じ本質であり、絶対存在の三つ組を有しているということ以外には、私達は多くを語ることはできません。Holy Monad Spirit Being Self（聖なるモナドである霊的存在のセルフ）のスパーク（火花）が、神の意志に完全に支えられ、人間のイデア（Idea of Man)を通じて下降することをそれ自身の自由意志によって決心します。人間のイデアは、Holy Monad Spirit Being Selfが通過できる多くのイデアの中のひとつです。

イデアの世界とは何でしょうか？絶対存在は無数の表現を持ち、人間のイデアはその中のひとつです。下から上を見上げる人間としての私達は絶対英知、絶対パワー、絶対善の状態を理解することができます。人間は私達がマインドと呼ぶプリズムを通してそれを理解します。マインドにはスーパーサブスタンス、サブスタンス、超物質、物質としての様々な波動のレベルがあります。勿論、人間は進化を通じて、現在の人間の理解レベルを遥かに凌駕するような状態に到達することでしょう。

Holy Monad Spirit Being Selfの源は、アウタルキー（自足）の状態である聖なるモナドであり、従って父なる神と同じ実体です。絶対存在はスーパーサブスタンスとしてのマインドを通じてそれ自体を表現し、ロゴスと聖霊は宇宙を創造するためにそれを使用します。Holy Monad Spirit Self（聖なるモナドである霊的セルフ）は人間のイデアを通じて微小なスパークを放射し、それが魂のセルフ・エピグノーシスとなります。それはノエティカルなサブスタンス、サイキカルな超物質、そして物質を身にまとうためにノエティックな世界から下降します。

このポイントにおける魂のセルフ・エピグノーシスと永遠のパーソナリティーは、粗雑な物質界への下降のひとつの段階であると見なすことができます。魂のセルフ・エピグノーシス内において、永遠のアトムは原型、イデア、法則、原因です。魂のセルフ・エピグノーシスが下降して実存の世界に入るポイントに到達すると、魂のセルフ・エピグノーシスはもうひとつの色合い、つまり私達が永遠のパーソナリティーと呼ぶものを帯びるようになります。今や、永遠のパーソナリティーはこの魂のセルフ・エピグノーシスの微小なスパークを、永遠のアトムとして実存の世界に放出する能力を有します。

Page2

**永遠のアトムは永遠のパーソナリティーによって物質界に放出されて、無知、二元性とイリュージョン（幻想）の世界に取り囲まれます。**

**永遠のパーソナリティーによって永遠のアトムが放出されることによって、現在のパーソナリティーが肉体を持ち、表現されるのです。**

生命現象のサイクルには初めと終わりがあり、これが誕生と死です。ところで、死とは何でしょうか？真理の探究者にとって死というものは存在せず、ひとつの状態から別の状態への変化のみがあります。

私達は僅か数キロの体重をもって生まれ、成長して思春期に達し、さらに成長を続け、形は常に変化してゆきます。人間の細胞も７年毎に入れ替わります。時間・空間内にあるこのセルフ、つまり本来のセルフの影は絶えずその物質的内容を変化させています。現在のパーソナリティーは何から出来ているのでしょうか？現在のパーソナリティーは例えばアレクサンダー、イアニス、マリアといった名前に返事をし、男性あるいは女性のどちらかの性を有します。

現在のパーソナリティーは特定の宗教に従う場合もあれば、どの宗教にも属さない場合もあります。世界は自分の意のままで自由になんでもできると感じる程パーソナリティーが十分に進化していても、何らかの国に生まれてきます。このパーソナリティーは一定の職業、仕事を持ち、その人特有の思考・行動があります。このパーソナリティーは多くの願望、欲望、恐怖、宗教的信念、偏見から構成されています。さて、これが現在のパーソナリティーであると言うことができますが、このパーソナリティーはまた絶えず変化し続け、変化の度合は人により異なります。安定した状態に留まるものはありません。実際、毎日変化し、年齢や体験の積み重ねによっても変わります。ですから、現在のパーソナリティーが永遠的なものであるか否かを論理的に問いを発することができますが、その答えは否となるはずです。

現在のパーソナリティーにおいて、常に留まっているものは何でしょうか？考えてください。どのような変化が生じようとも残るものは、“私”というポイントであり、それはセルフ・エピグノーシスと呼ばれます。この“私”というポイントを探ることによって永遠のセルフ（＊大文字）、つまり時空内のセルフにおける安定ポイントを見出すことができるでしょうか？それは永遠のパーソナリティーの投影である永遠のアトムであると述べました。

人は魂のセルフ・エピグノーシスの英知から引き出される何らかの原理のエピグノーシスを有しています。しかし、現在のパーソナリティーは意識を有し、その意識は印象を受け取り、その印象を現在のパーソナリティーが到達した意識レベルに応じて解釈します。

印象を受け取ってそれを採用したり、異議を差し挟むのはこの意識のセンターであり、そこにおいて私達自身の影、つまり時空間のセルフが解釈し、押しつけます。その結果、嫌だと感じる体験をしたりします。しかし、セルフ・エピグノーシスは常に現在のパーソナリティーが進化するのを助けるために、いわゆる“悪い意識”(bad consciousness)を生じさせます。このようにして、どちらかに傾く二重の状態が生じ、その結果人間は自分自身の過ちを通じて多くの苦しみの中に入ります。もしこれがなければ、現在のパーソナリティーは変化や進歩が全くない静止状態に留まり、成長することなく永久にイリュージョンの状態に留まることになります。

良いものであれ、悪いものであれ、経験によって何が起こるでしょうか？経験を通じて私達は徐々に思考・行動のやり方を変えていきます。この変化は初めは非常に遅々としていますが、後には恐らくもっと速くなるでしょう。しかしここで疑問が生じます。厳格に言って、一体誰が変わるのでしょう？正しい思考によって影響されるのは私達のどの部分で、憎しみ・嫉妬・攻撃性を現すのはどの部分なのでしょうか？それはひとつで、同じセルフなのでしょうか？これに対しイエスと言うことはできません。なぜなら、私達は既に二つの状態を区別しているからです。正しい思考に応じるひとつのセルフ、そして低レベルの理解を現すもうひとつのセルフです。ですから、論理的にみて、セルフ（Self)とその影のふたつがあると考えざるを得ません。影のセルフ、つまり現在のパーソナリティーは絶えず変化する時空間におけるセルフであり、それは特定の意識と無意識を有しています。このパーソナリティーはインナーセルフを装うのを好み、時にはインナーセルフのふりをして喜ぶこともあります。

Page3

このようなことは私達の周囲でよく目にします。多くの人々が粗雑な物質を通じて幸福を得ようと奮闘していますが、疑いの余地なく失敗します。私達は現在のパーソナリティーが絶えず変化することについて述べました。変化に気づくのに長年かかる場合もありますが、観察者はかなり速くそれに気づきます。純粋に物質的なものの獲得のみをあなたの人生における唯一の主要目的としてを設定し、他の目的を一切持たないと想像してみてください。多くの困難を経てあなたはそれを達成し、享受します。そして再び何か別の目的を設定し始めるかもしれません。なぜなら、一度それを達成すると、あなたのハートにおける欲求はもはやあなたを満足させないからです。これが虹を追いかけるということです。

セルフ・エピグノーシスは私達の実存の中心です。エピグノーシスには、個別性の創造を通じて自己実現に到達する能力を与えるという特質があります。現在のパーソナリティーのセルフ・エピグノーシスは私達自身であり、二極の世界を通じてそれ自身を表現しています。それは絶えず変化しているセルフであり、一時的なパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスです。

これを理解したなら、肉体が自分の存在の中心であるという考えから解放されねばなりません。また絶えず変化する私達の欲望が自分の存在の中心であるという考えからも解放され、それは単に欲望想念(desire-thought)のエレメンタルにすぎないことを理解すべきです。欲望が満たされる頃には、それらはもはや必要のない一種の生きた地獄となります。なぜなら、私達はもはやそれらを欲っしなくなり、それは無用のものとなるからです。

探究者の目的は、正しい印象を受け取れるような気づきのレベルに意識をもってくることです。言い換えれば、気づきの意識がセルフ・エピグノーシスと同化し、それによってその人のセルフ・エピグノーシスが印象を受け取るセンターとなるのです。これは、想念という神からの贈り物を正しく使用することによって達成されます。肉体における短い滞在期間中、何を追い求めるべきかを理解できるようになるでしょう。

人間が自分自身を無知な状態で取り扱う時、それはあたかも盲目の人が物質の海を泳ぐようなものです。誰も舵を取る人のいない船が風に吹かれて進んでいくようなものです。その結果、探究者は非論理的に行動するようにさえなりえます。勿論、私達は粗雑な物質世界を持っていますが、私達はまたサイキカル界をも持っており、それは感情のもうひとつのジャングルです。さらにまた、欲望想念のジャングルであるノエティカル界をも持っています。これら３つの世界は相互につながっているので、絶えずお互いに影響し合っています。不調和が大きくなると、一般に何らかの肉体的苦痛として現れます。

私達が正しい思考と自己観察を始める時、真理の探究者が直面する最初の仕事のひとつは、自分がこれら３つの体と共に機能していることを認識し、さらにインナーセルフとこれら３つの体である現在のパーソナリティーを区別できなければならないことを認識することです。この巨大な仕事をするために、私達は目的を分析する必要があります。

幼児の頃から人間は、欲望と想念の両方を誤用することをおぼえるようになりました。人間の大半は未だに想念的欲望(thought-desire)ではなく欲望的想念(desire-thought)を使っています。最初、人間は生き残る（サバイバル）という欲望を持ち、次に自分の感覚を満足させるために欲望に従います。このようにして人間はエレメンタルを生みだしますが、イエス・キリストによればそのようなエレメンタルは“つんぼでおし”です。ロジックを持たないが故におしであり、背後に目的を持たない故につんぼなのです。このようにして、現在のパーソナリティーは絶えずこの種の欲望的想念を空中に放出しています。

Page4

私達は現在のパーソナリティーのセルフ・エピグノーシスについて話していますが、このパーソナリティーの中身は何なのでしょうか？まず、名前、性別、そして現在のパーソナリティーに特定の色合いを与え、フォームとして認識可能な肉体的特徴といったものを挙げることができます。このフォームは感覚を持ち、その感覚を通じて生き、動いている物質界を理解することができます。

私達は理解できるという言葉に注意する必要があります。なぜなら、理解は各人の感覚を通じた解釈によるものだからです。最後に、想念と感情があり、それはこの次元においてその人の感情的世界を表現します。しかし、その表現は今生だけの結果のみならず、過去の全ての転生と今生での体験の総体の結果です。

無数の “つんぼでおし”のエレメンタルがあり、それらのエレメンタルは生き残るためにエーテル体を通じてエネルギーをチャージしなければなりません。そして、それらのエレメンタルが渾沌としたジャングルにも似た潜在意識を作ります。このようにして、人間は現在のパーソナリティーという環境を作り上げます。現在のパーソナリティーとは、潜在意識に貯蔵されているそれまでの体験の結果が考え方や行動として現れるものです。

パーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスそれ自体が生みだした情緒的弱点、恐怖、才能などを伴った想念・思考、行動の現れが現在のパーソナリティーです。それは寺院のようなもので、そこには過去に生みだされたもの全てが蓄積されています。その寺院はその中に住むのが天国のように楽しい場合もあれば、その醜さの故に生きた地獄のような場合もありますが、それはその寺院の中に存在するエレメンタルによります。パーソナリティーはこれらの状態に対して責任があります。さて、永遠のパーソナリティーであるセルフ・エピグノーシスからいくらか刺激を受けることによって、もし現在のパーソナリティーが自分自身が作った寺院を不満足に感じ始めたら、それを掃除する手段を講じるべきです。

ここにおいてエレブナが役立ち、汚れた部屋、ジャングルあるいは裏庭などなんと呼ぼうとも、多くの苦痛を経験せずにそれを掃除する助けとなります。探究者は自分自身の潜在意識を掃除することを学び、同時に、同胞の人間が各自の潜在意識を掃除できるよう助けることを学びます。しかしここにもレッスンがあり、それに対処する方法を知識として知っていても、私達はそれを無視して苦痛を経験する方を選びます。なぜなら、私達の内側のどこかに、ある一定の方法で行動するように駆り立てるもの、動機があるからです。そのような方法に従うことによって苦しむのは自分だけであることを十分に知っていてもそうします。

最初にそれらを作ったのと同じ動機を消去することによってのみ、一定の状況・条件を除去できる、という事実を受け入れる必要があります。それらを作ったのと似たような類の溶剤のみが、それを溶かすために使用できるのです。この事実を知れば、苦痛の存続期間も短くなり、そのような状態から抜け出ることができて、水の中で洗礼を受けたときのような爽快感を味わうことでしょう。

要するに、私達が経験するもの全ては決して無駄にはならず、レッスンを学ぶのにそれほど長い年月を費やさなくてもよいように、最終的には記録に加えられるのです。生きていく中で、蓄えるものをできるだけ早くから選択するのが賢いやり方です。さもないと、掃除がそれだけ長く困難になり、多くの涙と痛みを伴うようになります。

さて、これを別の面から見ることができます。ここに光がありますが、影を生みだすには光の前に何かを置く必要があり、影を写しだすものが必要です。同じように、人間には光として人間のイデアを通じた絶対存在があり、それが源です。光の前にあるものは魂のセルフ・エピグノーシスです。マインドは手段であり、それを通じて、およびその上にマインドという影が作られ、表現されます。私達はマインドという表面を有し、また創造界があります。影は人間の現在のパーソナリティーであり、表面であり、その上にマインドを通じて形成された実存の世界が表現されます。

Page5

実存の諸世界に入るスパークの部分が、肉体・サイキカル体・ノエティカル体という３つの体に現在のパーソナリティーという堅固な形を与えます。それが無知に覆われた現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスを構成しており、

それは絶えず変化しています。現在のパーソナリティーからあらゆる種類のエゴイズム、感情、思考および行動の仕方がはぎ取られたら、何が残るのでしょうか？

私達のセルフは本来はidol（＊像）ではありません。しかし、もし意識のセルフ・エピグノーシスのセンターが超意識のセルフ・エピグノーシスとなってもそれはフォームであり続けるのでしょうか？

超意識のセンターとして、それはフォームとして留まり、そのフォームは形の境界の中に見出されることでしょう。私達のセルフ(self)は本来はidol（像）ではなく、フォームではありません。それは時空の意味、印象を超えている絶対存在内の意識のセンターです。これらの印象は時空の意味内で短い期間のも受け取られ、それは生命現象内のものです。

**睡眠中、大多数の人は非実存の状態に入りますが、**目覚めると眠る前と全く同じ実存のセンター、理解・思考・行動のレベルに戻ります。

現在のパーソナリティーの人生は印象、フォーム、形以外の何物でもなく、それが肉体、サイキカル体、ノエティカル体に影響を与えます。

自分が３つの異なった体を持ち、３つの異なった世界に住み、３つの体、３つの世界が互いにつながっていることを認識すると、これまで生きてきたイリュージョンの掃除を始めるようになるでしょう。

私達の気づきによって、**まず最初に自分の無知を発見します。**この無知に基づいて私達は周囲の世界を理解しています。無知を理解することは気づき、意識を向上させる助けとなり、徐々に光りが見えるようになります。

この発見がなされたら、私達は自分の現在のパーソナリティーに対して忍耐強くならねばなりません。私達は非常に穏やかに無知とイリュージョンの触手から自分自身を解放していかねばなりません。さもないと、触手は苦痛をもたらすようなトゲを伸ばし、血を流すはめになります。

この非常にデリケートで重要な仕事の進め方が多くのレッスンのテーマとなります。現在のパーソナリティーを敵視せず、それを抑圧しないことが何よりも重要です。それは、神様のように屈強でなければ立ち向かうことができない怪獣のようなものです。今のところ、私達はそれを受け入れるしかありません。私達はまだ幼児期にあるので、前途に横たわる仕事を果たすために、まず歩き方を学び、強くならねばなりません。

完全に準備が整わないうちは、いかなる形の戦いをも始めません。

私達は常に神、絶対、神の聖性に包まれています。

EREVNA/AENGLISH/8A.DOC